

外国人日本語教師不安尺度の開発

Development of the anxiety scale for non-native Japanese language teacher

西谷 まり

要旨

本研究では外国人の日本語教師が有する不安について、先行研究と PAC 分析を援用したインタビュー調査を基に不安尺度を作成し、それをを用いて調査を行い、外国人日本語教師の不安の構造を明らかにした。因子分析の結果、「学生関係」、「自分の日本語・日本文化理解」、「授業実践力」の 3 つの要素が得られた。日本語教師教育では、「授業実践力」を高めることが重視されることが多いと予想されるが、「学生関係」についての指導及び、教師自身の日本語・日本文化の力を高める指導も重要であることが示唆された。

キーワード：不安、尺度、日本語教師、外国人、PAC 分析

1. 研究の背景と目的

これまで筆者は、日本語を学ぶ学習者の不安の研究に取り組んできた。また、筆者の勤務する大学では、2005 年度から日本語教育の学位取得プログラムがスタートし、日本語教師の養成を開始したが、入学者の多くが外国人留学生である。筆者は、この大学院コースで「日本語教授法」及び、国内・国外で実施する「教育実習指導」を担当してきた。また、それ以外にも、主にベトナムと中国において、日本語教師研修に携わってきた。その過程において、外国人日本語教師は、日本人教師とは異なる困難、不安を抱えていることがわかってきた。そこで、日本語学習者の不安を利用した効果的日本語指導がありうるのと同様に、外国人教師及び外国人教師志望者の抱く不安に働きかける効果的指導法もあり得るのではないかと考えるに至った。

教授者の不安に関連した指摘は、英語教育の分野でも見られる。例えば、Medgyes (1999) は、外国人英語教師についての研究の中で、外国人教師はたいてい、英語能力のハンディキャップを自覚しており、その点が教師として弱い部分だと考えていると述べている。Yoon (2012) は、学習者の不安を測定するための不安尺度 Foreign Language Classroom Anxiety Scale を一部分教師用にアレンジしたものを用いて、外国人英語教師の不安を測定したところ、外国人英語教師は授業で英語を話すこと及び授業の準備に不安を感じていると述べている。Mousavi (2007) は、外国人英語教師は自らの英語力の弱さが原因で、学生からの質問を恐れることがあること、特に、コミュニケーションな教育方法をとることに関して、英語力に自信がない場合に問題となると述べる。

しかし、外国人日本語教師の不安に関する先行研究、不安尺度は、管見の限りでは見当

たらなかった。大野木ほか（1996）の教育実習生の不安尺度が参考になったが、外国語を教える際に感じる不安については参考にできるものがないため、本研究では、外国人日本語教師の不安を測定するための不安調査項目を作成することにした。

筆者がフィリピン人日本語教師を対象に、自分自身の日本語能力と日本語指導力に対して感じている不安について調査を行った（西谷・松田 2011）結果、日本語指導力よりも自分自身の日本語能力に対して不安を感じていることがわかった。しかし、筆者が担当する日本語教師教育の経験の中で、外国人日本語教育及び教師志望者の不安は、日本語能力と日本語指導力だけでは説明がつかないものがあることもわかってきた。そこで、まず、外国人の教育実習生と経験の長い日本語教師に対してインタビュー調査を行った（調査 1）。次に、実際に日本語を教えているベトナムと中国の外国人日本語教師を対象に質問紙調査を行って、外国人日本語教師の不安の実態を明らかにした（調査 2）。

2. 調査の方法

調査の概要は以下の通りである。

調査 1：不安調査項目の作成のためのインタビュー

- 調査期間： 2012 年 4 月
- 調査協力者：日本の大学院修士課程在学中の中国人日本語教師志望者 2 名
教師経験 20 年以上の日本人日本語教師 2 名

参考にした先行研究が大野木ほか（1996）の教育実習生の不安であるため、本研究でも教育実習生を対象として調査を行った。中国人日本語教師志望者に対して調査を行った理由は、海外実習が中国で行われたからである。調査協力者 2 人が日本国内と海外において、教育実習を経験したあとに行った。教師経験の長い日本人日本語教師にも聞き取りを行った理由は、教壇経験のない大学院生だけでは想像ができない不安を抽出するためである。本研究の目的は外国人日本語教師の不安尺度を作成することであるため、調査 2 は教師志望者ではなく、現職の教師を対象に行うことにした。

調査 2：不安の構造を明らかにするための質問紙調査

- 調査期間： 2012 年 8 月～9 月
- 調査協力者：外国人教師 121 名（ベトナム人教師 55 名、中国人教師 66 名）、
詳細は資料 1 参照

3. インタビュー調査の結果

3.1. 調査の手順

調査は PAC 分析の手法を援用した。PAC 分析は、質的分析とクラスター分析を組み合わせた研究方法である（内藤 2002）。三島（2011）では、「これまであまり研究されること

のなかった新しい研究対象に関する質問紙を課発使用とする場合、PAC 分析は極めて有効な方法である。PAC 分析を利用すれば、質問項目を抽出できるばかりか、質問項目相互の関係や、その背景にある概念についても捉えることができる。」と述べている。

PAC 分析の核心は、調査協力者がデンドログラムにおける語のまとまり（クラスター）を見ながら、イメージや解釈を報告し、調査実施者はその報告、語の重要順などを鑑みて、総合的な解釈を試みる部分である。しかし、本調査では、不安に関する調査項目を抽出することが目的であるので、調査協力者の報告は活用したが、総合的な解釈を試みることは行わなかった。

まず、2 人の調査協力者に、以下の指示文を与えた。

指示文：日本と中国で日本語の教育実習をした時、どんな気持ちになりましたか。不安や心配、自信など、どんな気持ちや考えを持ったか、頭に浮かんだ言葉を、短い文で、思い浮かんだ順にカードに書いてください。

次に、自分にとって重要と思う順に並べ替え、項目間の類似度を 7 段階で答えさせた。その後、統計ソフト（SPSS Ver.18）を用いて、クラスター分析を行い、産出されたデンドログラムを調査協力者に見せながら感じたことを話させるという手順をとった。

3.2. 調査協力者 A のインタビュー結果

調査協力者 A は大学院修士課程の 1 年生である。中国の大学の日本語学科を卒業し、大学院研究生を経て、修士課程に入学した女性である。博士号を取得し、将来は中国の大学で教壇に立ちたいと希望している。

表 1 調査協力者 A の記述

重要度順		想起順
1	母校に帰って大学時代の先生に会えてうれしい	1
2	学生がよく反応してくれたので、日本での実習よりやりやすい	7
3	私にもできるんだとちょっとだけ自信がついたかもしれない	5
4	思ったより緊張した	2
5	学生とどう交流すればいいかちょっとわからない	4
6	実習の前から一回ぐらいは、失敗すると思っていた	3
7	自分は教師には向いていないのではないかと不安だった	6

「実習する前には、1 回ぐらい失敗するんだろうと覚悟していたので、2 回目はだめだったけれどショックではなかった。3 回目は絶対成功させようと思った。学生との交流がうまくできないというのは、学生とどうやって距離を縮めるか、雰囲気盛り上げればよい

かがわからない。というか、わかってもうまくできないと不安に思っている。成功というのは、伝えたいことが伝わるのが一番大事。そして、かたい雰囲気ではなく、学生たちも話して、学生たちが授業の中にいること。1回目の授業がうまくいかなかったのは、残された時間が30分しかなかったから。経験のない私のような人にとって、変更があると不安¹。でも、授業を延ばしたくなかった。学生にも都合があるので、時間どおり終わらせた。

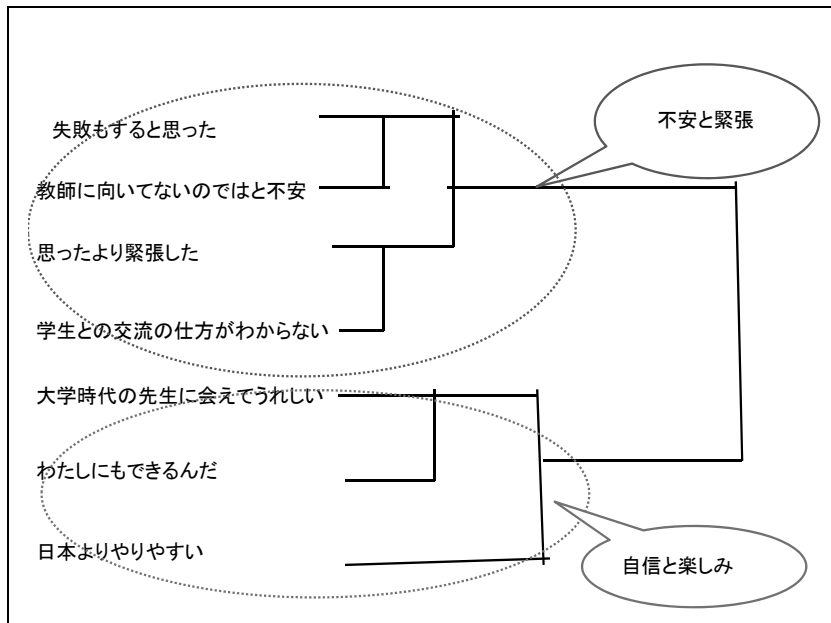


図1 調査協力者Aのデンドログラム

教師に向いてないという不安は、国内実習でも感じた不安だが、私は自分で読んだり書いたりして、そういう形で人と交流するのに向いているが、教師というのは教壇に立って、学生とちゃんと会話して人と直接に接して交流しなければならないから。教師に向いていないんじゃないかなと思った。

今度は実習するっていう気持ちより大学に帰る²、だから自分の成長を大学のときの先生に見せる気持ちが大きいので、先生に会えたことが嬉しかった。日本で実習するよりやりやすいというのは、実習する環境が私が親しんでいた環境だからというのではなくて、学生たちが協力してくれて、指示を出したら私の指示どおりやってくれたからやりやすかった。国内実習ではテキストを読んでくださいと指示を出してもちゃんと読んでくれなかつ

¹ 45分の教案を準備していたが、前の実習担当者の時間が延長されたため、30分しか時間が使えなかった。

² 調査協力者Aが海外実習を行ったのは、彼女の母校である。

たり、そういう感じだったので。中国語が通じるということとはあんまり関係ないと思う。今回のクラスの雰囲気は、新しい人に自分の實力を見せようとする気持ちがあったと思う。その気持ちの働きで協力をしてくれたと思う。

私にもできるんだというのは、100分の授業をしたことはなくて、今度初めて100分の授業をして、うまく、無事にできたのは私にもできるんだろうということにつながっていると思う。3回目の授業をする時の気持ちは、前の2回と国内実習のときの気持ちと全然違う。時間がたつことを気にせずに、好きなことを学生たちに伝えるから³、学生たちはちゃんと私の話を聞いてくれているとわかっているから。

まだどうやって授業をコントロールするかできない、一定の経験を積んだので、その経験を生かしてもっといい授業ができるかもしれない。でも、どこを改善すればいいのか、つまり、どうやって学生たちと交流すればいいのかは、まだ把握できない。

多分、先生の思ったより、わたし、もっと不安だったと思う。先生は教案も書いたし、準備をしたし、授業は大丈夫だと思ってくださったと思っているが、実際授業をやらないと、ほんとにどうなるのかわからない。教案どおりにいくわけでもないし、その日の私のテンションと学生のテンションのこともあるし、どのような授業になるかだれでもわからないので不安だった。

非母語話者のもう1つの大きな不安は自分の日本語だ。人によっては、意味が伝われば大丈夫だと思っているが、私は文法の正しさにこだわる。だから、よく考えて話す。でも日本語力を上げるにはこの方法はあまりよくない。何も考えずに、とにかくたくさん話そうとしたほうが上達が早い。」

調査協力者 A は、「学生とどうやって距離を縮めるか」「雰囲気を盛り上げるか」「どうやって学生と交流するか」といった学生との関係に最も不安を感じていることがわかる。「学生がちゃんと話を聞いてくれる」「学生が協力してくれる」ことが自信につながっている。また、「自分の日本語」にも大きな不安を抱き、「意味が伝われば大丈夫ではなく、文法の正しさにこだわる」自分を表現している。さらには、「変更があると不安（時間のコントロール）」であるとも述べている。

3.3. 調査協力者 B のインタビュー結果

調査協力者 B も大学院修士課程の1年生である。中国の大学の日本語学科を卒業し、来日し、日本語学校を経て、修士課程に入学した。日本での就職を希望し、インタビュー時は就職活動中であった。日本で仕事をした後、中国に戻って日本語教師として教壇に立つことを希望している。

³ 調査協力者 A は俳句が好きで、この時の担当箇所は俳句だった。

表2 調査協力者Bの記述

重要度順		想起順
1	専門知識はあるがわかりやすく説明するのが下手	3
2	外国人として日本語を教えるのに自信がなかった	2
3	学生の間違いを直すのが下手だった	7
4	初めて教壇に立った時とても緊張した	1
5	宿題の間違いが多かった問題に配慮しなかった	6
6	学生の質問にうまく答えられなくて気にした	5
7	性格が明るいので授業の雰囲気は心配しない	4
8	活動に学生たちが積極的に協力してくれてとてもうれしい	8

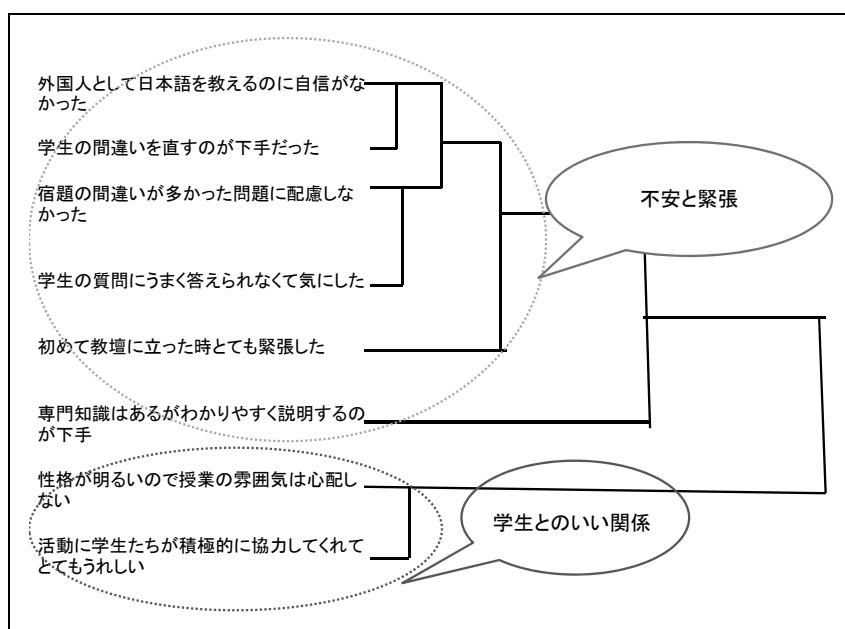


図2 調査協力者Bのデンドログラム

「外国人として自分の日本語に自信がない。学習者に信頼してもらえるかということ。発音、文法的な表現、日本文化について授業で聞かれると・・・学習者が突然教師になることが不安で、教育実習は大変だった。普通に外国人として質問に答えるのと、先生の立場で質問に答えるのとは違う。先生の立場では、わかりやすく、受入やすいようにできるかどうか気になる。文法に関しては授業を受けてきているので、自分ではわかっているが、うまく伝えることは難しい。専門的知識をうまく生かせるかどうかわからない。どんな例文が適切とかか。学習者が自分から言い出せるように努力したい。活動を入れたら効果的だが、母語話者と違って、学習者の反応を見ながら、話題を変えていくことができない

い。母語話者はわからないときには話題を変えるのがうまい。経験が長ければうまくいくかも。昔の中国は先生が話して学生はノートをとる、それを覚えればテストもうまくいった。活動をする、学生との信頼も強くなり、一体感も生まれるが。活動は反応が良いけれども、あとで学生の頭にどのぐらい残るかわからない。教案が大変。母語話者と比べて教案も大変だ。学習者の反応も想像しなければならないし、文法と会話の授業では書き方が違う。教案が書いても、その通りに進むとは限らない。

海外実習では学習者が私たちが来るのを期待して待っていてくれたので、反応がとてもよかった。日本の事情について彼らより詳しいので信頼されたと思う。

自分はずっと日本語学習者であり、教えることより勉強がしたい。会社では毎日違う部分が勉強になるだろうけれど、母国で日本語を教える場合には、母語を使うので運用はうまくならないし、細かいことだけしか勉強できないし、学生のほうがアニメなどで新しい日本語を知っている。」

調査協力者 B は、「外国人として日本語を教えることの不安」「学習者が突然教師になることの不安」を強く感じている。デンドログラムからは「学生の間違いを直すのが下手」「学生の質問にうまく答えられない」「専門知識はあるが、わかりやすく教えるのが下手」といった授業の実践に関する不安が多く見られた。インタビューでは、それを「普通に外国人として質問に答えるのと、先生として質問に答えるのとは違う」からだ指摘している。また、「専門知識をうまく生かして、学生に伝えること」の難しさを感じ、適切な例文の提出も難しいと感じている。外国人として「発音、文法的な表現、日本文化について」答えることに自信がないとも述べている。さらには、母国で日本語を教える場合、自分の日本語の運用力が伸びないのではないかと心配している。しかし、学生の反応がとてもよく、それは自分が日本の事情に詳しいために信頼されたのだと感じている。

4. 不安調査項目の作成

作成した調査項目は、20 項目である。大野木ほか（1996）の教育実習生の不安尺度は「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」の四因子構造であるが、「体調」「身だしなみ」は教育実習に特有な項目から形成されており、本研究の目的には沿っていないため除外した。「授業実践力」「児童・生徒関係」の中から、教育実習生のインタビューにも共通する項目 1、2、3 を採用した⁴。日本語教師 2 名の内省からは、実習生のインタビューからは出て来なかったが、筆者のこれまでの外国における観察と一致し、重要であると思われる項目 4、5、6 を、その他の項目は、外国人日本語教師志望者 2 名のインタビューから作成した。

⁴ 著作権者から 2012 年 7 月に項目採用の許諾を得ている。

外国人日本語教師不安尺度

1. 授業中に予想外の質問がでたらパニックになるのではないか不安だ
2. 学生の日本語力のばらつきに対応できるかどうか心配だ
3. 学生たちとうまくやっていけるか心配だ
4. 中国（ベトナム）語をどのぐらいの割合で使用すればよいかわからずに不安だ
5. 母語との違いをどこまで説明したらいいかわからず不安だ
6. 学生が日本語に関して持っている不安を取り除けるかどうか自信がない
7. 自分でわかっていることを授業でわかりやすく説明できるか不安だ
8. 教案がきちんと書けていてもそのとおり通り授業はいかないのではと不安だ
9. 日本語だけでなく日本文化をうまく伝えられるか不安だ
10. 授業でとりあげる例文が学生にとってわかりやすいか不安だ
11. 学生が授業中よく反応してくれるか心配だ
12. 学生との距離をどうやって縮めるかわからず不安だ
13. 学生に自分の日本語を信頼してもらえるか心配だ
14. 自分が文法を正しく使えているか不安だ
15. 自分の発音は正しいか不安だ
16. 自分が日本文化を正しく理解しているか不安だ
17. 今後日本語がうまくならないのではないかと不安だ
18. 学生の間違いをきちんと直せるか不安だ
19. 学生の質問にきちんと答えられるか不安だ
20. 新しい日本語を学生のほうがよく知っているのではないかと心配だ

5. 質問紙調査の結果

次に、この20項目を用いて、外国人日本語教師121名に対して、質問紙調査を行い、因子分析を行った。前述の統計ソフトを利用し、主因子法とプロマックス回転を用いた。質問には5件法（5. 強くそう思う、4. かなりそう思う、3. そう思う、2. あまりそう思わない、1. 全然そう思わない）で答えさせた。

大野木ほか（1996）では「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」の4因子が抽出されているが、本調査では、三因子が得られた（表1）。第一因子は「学生が授業中よく反応してくれるか心配」「学生が日本語に関して持っている不安を取り除けるかどうか自信がない」「学生との距離をどうやって縮めるかわからず不安」等の学生対応に関するもので「学生関係」と名づけた。第二因子は「自分が日本文化を正しく理解しているか不安」「学生に自分の日本語を信頼してもらえるか心配」「自分が文法を正しく使えているか不安」「自分の発音は正しいか不安」等の項目からなり、「自分の日本語・日本文化理解」と命名した。第三因子は母語使用の割合や「自分でわかっていることを授業でわかりやすく説明できるか不安」「授業中に予想外の質問がでたらパニックになるのではないか不安」等の項目なので、「授業実践力」と名づけた。それぞれの因子相関は高い（表4）。因子1、因子2、因子3それぞれの α 係数は0.88、0.88、0.87であり、十分に信頼度が高い。

表 3 因子分析の結果

	項 目	因子 1	因子 2	因子 3
学生関係	学生が授業中よく反応してくれるか心配だ	.799	.502	.463
	学生が日本語に関して持っている不安を取り除けるかどうか自信がない	.786	.512	.555
	授業でとりあげる例文が学生にとってわかりやすいか不安だ	.747	.511	.714
	学生との距離をどうやって縮めるかわからず不安だ	.719	.535	.532
	学生の日本語力のばらつきに対応できるかどうか心配だ	.685	.507	.538
	学生たちとうまくやっていけるか心配だ	.654	.556	.527
日本語・日本文化理解	自分が日本文化を正しく理解しているか不安だ	.542	.830	.623
	学生に自分の日本語を信頼してもらえるか心配だ	.747	.814	.662
	自分が文法を正しく使っているか不安だ	.674	.806	.710
	日本語だけでなく日本文化をうまく伝えられるか不安だ	.468	.706	.526
	今後日本語がうまくならないのではないかと不安だ	.499	.635	.545
	新しい日本語を学生のほうがよく知っているのではないかと心配だ	.449	.633	.434
	自分の発音は正しいか不安だ	.384	.631	.571
授業実践力	学生の質問にきちんと答えられるか不安だ	.598	.726	.850
	学生の間違いをきちんと直せるか不安だ	.537	.655	.827
	自分でわかっていることを授業でわかりやすく説明できるか不安だ	.559	.493	.730
	授業中に予想外の質問がでたらパニックになるのではないかと不安だ	.492	.582	.714
	母語をどのぐらいの割合で使用すればよいかわからず不安だ	.506	.540	.658
	母語との違いをどこまで説明したらいいかわからず不安だ	.612	.606	.613
	教案がきちんと書けていてもそのとおり通りいかないのではと不安だ	.475	.457	.511
因子寄与率 (%)		48.99	6.91	5.40
累積寄与率 (%)		48.99	55.9	61.3

表 4 3 因子の相関

	学生	理解	実践
学生関係		.670	.688
自分の日本語・日本文化理解	.670		.738
授業実践力	.688	.738	

6. まとめ

本研究では外国人の日本語教師が有する不安について、先行研究とインタビュー調査を基に不安尺度を作成し、それを用いて外国人日本語教師を対象とした調査を行い、外国人日本語教師の不安の構造を明らかにした。その結果、「学生関係」、「自分の日本語・日本文化理解」、「授業実践力」の3つの要素が得られた。それぞれの因子の相関は高い。

日本語教師教育では、教材分析、教案指導、教育実習等において、「授業実践力」を高めることが重視されることが多いと予想されるが、「学生関係」についての指導が重要であ

ることが示唆された。また、日本語・日本文化についての知識と運用を高める工夫、教師になった後で自律的にブラッシュアップしていく方法を伝えることも必要であることが明らかになった。

7. 今後の課題

本研究で開発した不安尺度では、測定しきれなかった可能性を踏まえて、尺度を再検討し、教師教育に活用していきたい。また、筆者は、外国人の日本語学習者の不安についての研究において（西谷・松田 2012）、失敗の効用を認識させる指導が有効であることを証明してきた。転ばぬ先の杖を用意するだけでなく、不安を効果的に利用することも必要である。外国人日本語教師教育において、失敗の効用を認識させる指導方法を開発し、その効果を検証していきたい。

謝辞

本研究は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）研究課題番号 23501138）の助成を受けたものである。関係各位に感謝する次第である。

参考文献

- Medgyes, P. (1999) *The non-native teacher*. Max Huber: Verlag.Germany
- Mousavi, E, M (2007) Exploring 'Teacher Stress' in Non-native and Native Teachers of EFL: *ELTED*, pp.33-41
- Yoon, T. (2012) Teaching English through English: Exploring Anxiety in Non-native Pre-service ESL Teachers, *Theory and Practice in Language Studies*, Vol2, No6, pp.1109-1107
- 大野木裕明、宮川充司 (1996) 「教育実習不安の構造と変化」『教育心理学研究』Vol.44 No.4、pp.454-462
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 三島浩路 (2011) 「PAC 分析を利用した質問紙の開発と利用—「学校危機の問題を通して」—『PAC 分析研究・実践集 2』、pp.79-99
- 西谷まり、松田稔樹 (2012) 「言語不安の解釈に着目した日本語教育用 e-learning 教材の開発」『教育システム情報学会』Vol.29、No.3、pp.140-151
- 西谷まり、松田稔樹 (2011) 「非母語話者日本語教師の教授不安」『日本教育工学会研究報告会報告集』JET10-5、pp.153-160
- 西谷まり (2012) 「非母語話者日本語教師志望者の教授不安」『日本語教育世界大会予稿集第一分冊』 pp.324

資料 1 調査 2 の調査対象教師の属性

		外国人日本語教師 121 (名)	
		ベトナム 55 (名)	中国 66 (名)
現在教えている機関	大学	12	56
	日本語学校	43	10
	10 年未満	43	49
	10 年以上	4	16
	不明	8	1
	平均 (月)	59 か月	111 か月
性別	女性	44	50
	男性	7	13
	不明	4	3
年齢	20 代	20	16
	30 代	21	29
	40 代以上	5	21
	不明	9	0
教育を受けた機関	大学・大学院	22	59
	民間養成	24	0
	なし	4	4
	不明	5	3
日本留学経験	経験あり	12	30
	経験なし	43	35

(にしたに まり 国際教育センター准教授)